

〔資料紹介〕

日独青島戦争出征日誌

— 斎藤分隊長 —

斎藤 聖 二

一九一四年七月二八日にヨーロッパではまった第一次世界大戦は、八月二三日に日本がドイツの膠州湾租借地を攻撃したことで東アジアに波及した。日本は目前のドイツ軍根拠地を排除する好機が来たと捉え、中国中央部での勢力拡張と黄海・北京地域を押さえる観点から、山東省を日本の勢力圏とすることはきわめて好都合なことと考えたのである。イギリスが対独開戦をした後に、同盟国イギリスからの要請という形を作って、日本はドイツに宣戦布告をした。このときイギリス政府は、戦時下日本が中国で利権拡張行動をすることを懸念しており、日本を制御するには連合国側に加えておくことが有効だという思いを抱いていた。八月一日に発布された日本の対独最後通牒文は、「極東の和平を紊乱すべき源泉を除去し、日英同盟協約の予期せる全般的利益を防護するの措置を講ずる」ために、ドイツ軍艦の退去と膠州湾租借地の中国還付を目的として日本に引き渡すことを要請したものである。日中間には、他に満洲権益や華南利権をめぐる懸案事項があったが、イギリス政府の対日懸念を考慮すれば、ドイツ膠州湾租借地以上に中国利権に関する積極姿勢を示すことは不可能であった。日独青島戦争は、あくまでドイツ軍の排除と山東省利権の継承問題に限定してはじめて実施が可能になったのである。^①そこから、日本

はこの戦闘において、戦後の中国との膠州湾処分交渉を有利に進められるように、ドイツ利権をしっかりと占拠していくことを重視して行くことになる。日本軍の上陸地点の選定やその後の作戦展開には、その点への配意が慎重になされている。

青島にいたドイツ軍は五〇〇〇名程度に過ぎず、戦争下にある遠い本国から援軍が来ることもあり得なかった。しかし、海に向かう青島市街地は、その背面を取り囲む丘陵地帯を中心に、重砲七〇門、軽砲五二門という膨大な大砲群で固められていた。この頑強な防備を破る攻略法としてまず考えられるのは、海からの徹底した艦砲射撃による砲撃戦である。しかし、青島市街地には多くの一般住民が住んでおり、また国際貿易港であるために諸外国の関連施設も多数あって、その作戦により生じる多大な犠牲への国際的非難はまぬがれない。まして戦後に青島を利用しようと考えていた日本にとって、市街地の完全な破壊は大きな損失となる。そこで日本軍は、背後の陸地から青島丘陵の大砲群に迫り、野山砲で殲滅するという作戦を立てた。この方法であれば、青島市街地につながる山東鉄道を占拠することも可能になる。この鉄道は、日本が手に入れたドイツ利権の主要なものの一つであった。^②日本軍は総員約五万人（内、前線戦闘員は三万人弱）、重

砲九六門、軽砲四二門を送り込み、上陸から勝利まで六七日間の戦闘を展開する。そのうちのほとんどが敵砲弾を避けながらの大砲群の陸上移送行動と、その据え付け作業で、最後の八日間の総砲撃と白兵突撃が実質的な本格戦闘であった。死傷者も砲弾によるものが半数を超え、その数も最後の総攻撃時がもっとも多い。

ここに紹介する従軍日誌は、その重砲戦の一角を担った野戦重砲兵第二連隊傘下の段列第一小隊第六分隊長のものである。彼の階級は日記に記されていないが、通常は軍曹が分隊長を担うことから、おそらくは彼も軍曹であったと考えられる。また名前は、斎藤という苗字しか分からない。年齢も不祥である。神奈川県横浜市保土ヶ谷出身の人物であることと、英語が話せ、自己分析能力に秀で、リーダーとしての資質に富んでいることを日誌に見て取れる。一〇月二七日条から白根学校（現・横浜市立白根小学校）の教員の可能性もある。なお、砲兵連隊に所属する段列とは、弾丸・糧食その他の需品を砲兵連隊に補給する輸送部隊のことであり、また着弾地観測所の設営等、砲隊行動に関わる隣接整備支援作業もおこなう補助部隊の名称である。輸送部隊にはもう一つ輜重隊があるが、これは主に輸送専門部隊として区別される。

この野戦重砲兵第二連隊（所在は現在の横須賀市立不入斗中学・坂本中学・桜小学校の敷地）は、宣戦布告の後に、日独青島戦争の総指揮官である独立第一八師団長神尾光臣大将と参謀本部との打ち合わせの際に、神尾大将の要請で追加動員が決まった第二次編制部隊の一つである。連隊長は高橋綏次郎大佐、三八式一二センチ榴弾砲二四門、戦闘員一三六九人、非戦闘員二五五人で編成されていた。斎藤分隊長らの段列所属員は、兵士ではあるが前線で戦うわけではないので、これらのうちの非戦闘員として数えられている。

本日誌は、戦場の生々しい日々を描いているというだけでなく、あまり注目されない段列分隊の動きを内部から見ることができるものがある。しかも、九月一日に横須賀軍港を出航し、一二月三十一日に凱旋して、帰村するまでのほぼ毎日が記されている。内容は簡潔だが、段列分隊長の仕事の大方を捉えることができる貴重な資料と言える。現存する手帳は、戦場で記した日誌をそのまま転写したものであることが「序」に書かれている。

昨年、本紀要で「日独青島戦争従軍日誌 ―山田耕一中尉―」を紹介したが、その山田中尉は歩兵連隊の小隊長であり、四房山前方の海泊河岸を最前線として戦っていた。そこは、今回の日誌の主である斎藤分隊長が着弾観測所を設営した夾嶺溝の四キロ前方にある。山田中尉は日誌に、「我砲弾の破片が時々来たり」（十一月一日条）と書いたが、その砲弾はこの野戦重砲兵第二連隊の三八式一二センチ榴弾砲であったと思われる。一月七日の山田中尉の日誌には（六日条に記載）、「午前二時頃と思ひし頃、我が砲兵は敵の第一線歩兵陣地に向けて榴散弾を浴せかけた。然るに我々は敵陣地より二十米も離れて居らぬ。且つ夜間であるからして、敵の陣地より尚ほ手前にて破裂する砲弾多くして、吾々の近傍に落着するもの多く、吾々は遂に四方より射弾の中に入れられた。…運悪くば味方の弾丸に当りて大死するの止むを得ざるに至る。斯くてはならじと、茲に死を決して後退する考へを為した」という生々しい記述がある。これらの砲弾は、斎藤分隊長らが補給したものである可能性が高い。その日に斎藤分隊長は、補給弾丸を得るために砲陣地後方三キロの河南中間廠と砲隊とを輓曳五車両で往復する作業をおこなっている。山田小隊長と斎藤分隊長は、同じ戦場空間で数キロ離れ、片方は最前線で白兵突撃に命がけで挑み、他方はそれを援護する砲撃部隊への砲弾補給作業に携わっていたのである。

る。二つの資料をあわせ読むと、銃声、砲声、爆発音、そしてむせるような火薬臭の漂う戦場空間を追体験することになる。

日独青島戦争の公式記録には、陸軍参謀本部が一九一六年に編纂した『秘 大正三年日独戦史』がある。しかし、戦場の実態やその機微をうかがい知れる兵士たちの記録は、期間も短く、参加兵数も少ないために、現在あまり多くは残されていない。本日誌は、麗澤大学教授櫻井良樹氏が所有していたものである。氏のご厚意により起稿することができた。ここに記して感謝を表する。なお、起稿作業に際して演習履修学生武弓友紀氏の助力を得た。

註

- (1) 日独青島戦争後に中国に提起された二十一か条要求は、その要求内容に満蒙・華南に関する懸案事項が多く含まれているため、対独開戦の主たる目的はそこにあつたと見なされることがある。あるいは、その交渉の際に、還付代償を満蒙懸案に絞っていたら行き詰まることもなかったと説かれる場合もある。しかし、それらは後目による論評であり、日英同盟下での開戦はあくまで膠州湾租借地を巡る問題に限定することで可能になった点を忘れてはならない。日本の当局者たちの意識には、当初から満蒙・華南の関する懸案の解決意欲はあつたが、イギリスとの開戦協議でそれを言い出すことはできなかった。まして満蒙問題に絞って膠州湾還付交渉をおこなうなどということは、対英関係上あり得ない想定である。この点については、斎藤『二十一か条要求案の成立経緯』『東アジア近代史』第二号、二〇一七年六月、で詳述したので御参照願いたい。
- (2) 開戦当初から大隈重信首相が山東鉄道取得への意欲を語ってい

たことは良く知られている（伊藤隆編『大正初期山県有朋談話筆記／政変思い出草』山川出版社、一九八一年、五九～六一頁、『加藤高明 下』同伯伝記編纂委員会、一九二九年、七九頁）。

(3) この戦争の内容に関しては、斎藤聖二『日独青島戦争 秘 大正三年日独戦史 別巻2』ゆまに書房、二〇〇一年、を参照されたい。

(4) 野戦重砲兵第二連隊には輜重隊も付属しており、それは本部・第一弾薬縦列・第二弾薬縦列で編成されていた。輜重隊の方は少佐を隊長とする独自の本部があり、主に後方輸送業務に携わるのに比べ、斎藤の属する連隊段列は連隊本部の指揮下にあり、連隊の身近で動く部隊である。

(5) 「独立第一八師団第二期船舶輸送計画」一九一四年九月作成（防衛省防衛研究所）JACAR Ref.C10080319900 には、九月一四、一五日に横須賀にて乗船する者将校五七名、下士卒一五六七名、馬匹一三七八頭とあり、上陸は二一、二二日と予定されている。

(6) 斎藤聖二「資料紹介 日独青島戦争従軍日誌 ―山田耕一中尉―」『茨城キリスト教大学紀要 第五十号 一 人文科学』茨城キリスト教大学、一九一六年一二月。

(7) 総攻撃開始から陥落までの野戦重砲兵第二連隊の全砲での射撃数は以下の通りである。段列部隊は全三小隊（一小隊六分隊編制）でこの弾丸補充を担当した。

12	サンチ砲	破甲榴弾	榴散弾
10月31日		2154	277
11月1日		1688	703
11月2日		1079	279
11月3日		799	274
11月4日		686	392
11月5日		1409	1166
11月6日		1147	514
11月7日		334	191

(8) 現在、本日誌は、櫻井氏のご意思により国立国会図書館憲政資料室に寄贈されている。

※活字化に当たり、原則として漢字は常用漢字に改めた。旧字体は新字体に、略字、異体字は正字に直した。また、転写ミスと判断できるものは訂正した。なお、濁点は適宜補い、送り仮名は原文のままとした。誤記でも原文のままとしたものには「ママ」を付した。「午后」「記念」等はそのままとした。原文はカタカナ漢字交じり文であるが、原則的にカタカナはひらがなに直した。また、句読点は適宜加えた。() は原文、「」は起稿者註である。

一九一四年(大正三年)

小引。大正三年九月四日動員下令。同八日午前十時入隊。同日野戦重砲兵第二連隊・連隊段列に編入。同日連隊段列第六分隊長を命ぜらる。大正三年九月十五日上船、横須賀出帆。

以上の日記は多忙なりし為記入の暇なく、十五日以後の者を更に原帳より清書して紀念の為且後日の笑柄の為に之を残す。但し文章は戦場にて書きたるまゝにして少しも改訂を加えず。蓋し当日を忍ばんが為なり。

九月十五日。晴。午后一時十五分、万田山丸に乗船。六時三十分、相模灘。

九月十六日。昨夜船の甲板上に座眠す。遠州灘の波浪面を衝つに至り、雨かと思つて飛び起き、中甲板なる室に帰らんとすれば、光星大空に満つ。正午田子軍曹より日直を申受く。日和より浪静なり。午后三時頃紀州沖を航行す。室内に端座せるに異らず。午后六時瀬戸内海に入る。

九月十七日。朝起きると船は止まつて居る。梶機が破損せるなり。八時過ぎ治療患者を連れて船尾なる医務室に至る。老水夫あり、屋島、高梁、金毘羅様等の各蹟を指示す。町田の近在なりと云ふ内田と云ふもの余の部下にあり、白根一帯を知れり。何となく懐かし。十時十五分讃岐の沖を過ぐ。午后一時半、内海愈々狭くなりて我家と向山と位の間を航行す。箱庭の如き景なり。伊予の今治町を左に見ながら進む。風なく天気晴朗波静なり。栗の実実る赤松山の小春日和を思ふ。満船の兵士の中、必ずや一割位は返らざる旅をなしつゝあるべけれど、元氣は好し。「やがて死ぬ景色は見えず蟬の声」。能く考へて見ると、何となく夢の様である。又勇ましくも嬉しくもある。昨今分隊の日野出の者と語る。流石に妻子を思ふらんかりき。さもあるべし。こんな時は一道の信念なるものが需要である。僕には今迄宗教の信念が無かつたが、今や其必要を知つた。差し当り只聖人の訓言を心に信じては此現境に楽しんで居る。それは、

一・苦しむ者は幸なり、何となれば樂を得なければなり。

一・君臣一体忠孝一致。

九月十八日。昨夜〇時半、馬関と門司の間を通る。余は眠りて知らざりき。今夜の中に玄海を過ぐべしと云ふに、海極めて穩にして旭日船尾に当たりて昇る。昨日午前を以て船中の売店はサイダーのみになれり。淋しき事甚だし。天佑は我軍を利し、水天宮の御守札我身を守り給ふ。午前壱岐対馬を見て航行す。小春日和の海の波少しも無く、只間断なく浪を切つて行く梶機の音のみ聞ゆ。眠りを催はす。午後二時四十五分、後にも先にも陸地見えす。明朝は朝鮮に達すべしと云ふ。天氣は実に良し。午後五時十五分、朝鮮の島見ゆ。七時十五分に至り巨文島及濟州島見ゆ。明午前木浦着、各船集合、命令を受けて海軍に護衛されて行く予定なりと聞く。

九月十九日。天氣晴朗なり。太陽、船の前右方に出ず。乗船は已に朝鮮の西海岸を北航せるなり。此辺り海水濁りて黄色を呈す。午前七時、島に人家見ゆ。七時三十五分、乗船は碇を放ず。何所々々の隊に動員令下せるにや知れざれど、今日木浦の沖に集合とあつて御用船は五艘集り、六艘となり、二十艘も入り来る。何れも甲板はカーキ色の服で満ちて居る。午後三時、本邦人の商人朝鮮人を督して物売りに来る。兵隊が欠もせる煙草を競ひ求むる様戦にも似たり。

九月二十日。雨天強風、黄海荒る。朝五時の起床と共に船は航進す。午前八時半に至りて船員の語るを聞けば、波浪は一丈余の高さなりと。余は酔はず。午後、黄海の只中なり。前後四方陸を見ず。明朝は上陸準備にかゝる。

九月二十一日。晴天。午前、労山灣着。下士一同、隊長中野大尉「太助、連隊段列段列長」の帰船を待ちて命令を聞く。曰く、

一、敵は白河左岸にあり。

一、本隊は即墨に向て行軍す。

一、本隊は最始の日、王哥庄露營の予定なり。

甲板より陸地を見れば、鋸の如き山の一連あり。昨日迄に海軍の戦陸隊が敵の騎兵を逐ひたる所なりと聞く。此二、三日、夜の寒氣甚だしく内地の比にあらず。此日上陸を延期す。

九月二十二日。晴天。朝夕、特に曉方の冷氣甚だし。今日こそ上陸の予定なりしに実行に至らずして日は暮れかゝる。これにて徒然船中に止まること二日なり。御用船の湾内に集合するもの三十余なり。眼を放てば海岸奇石の間に支那人の家屋点在せり。昨夜、馬屋番當直なりし輜重輪卒の中一名は首を切られ、一名は行方不明なりと。支那人の行為なりとて一層注意すべきことなり。余も日本刀を横須賀に置き来りしは残念なり。出戦の準備には次の者は必ず必要なり。――呼

子、方眼紙手帳、日本刀を仕込みたる軍刀、靴下、手袋、油紙、図囊、チョッキ、腹巻のポケットあるもの、防水布にて作れる袋、防水布製財布、支那語の本、懐中電氣、短刀、日記帳、字書（以下欄外加筆）※西洋紙、万年筆、小出財布、知人宿所録。

九月二十三日。曇天。朝の寒氣猛烈なり。午後二時、設営隊として第一発に上陸を命ぜらる。午後一時頃、余は九名の兵卒を指揮し、船のボートを漕がしめ、舵機を取つて陸地に向ふて馬繫場を設置す。上れば印度人、英国人、支那人あり。異様の光景なり。農作物は、きみ、枝豆、甘藷等なり。五時四十分帰船す。阿久和の者小林作次郎は、今日の衛兵として、帰船せず。朝の寒さに思う事は横須賀に置き来りし真綿のキヨッキの事なり。

九月二十四日。晴。愈々今日は上陸と決す。午前八時、輪卒四十名を引率して上陸す。午後は輪卒七名を督して馬匹上陸掛を命ぜられ、数回本船と海岸との間を往復す。

九月二十五日。快晴。馬匹を上陸せしむべく、本船と上陸地との間往復すること前日の如し。午前中に上陸完結。午后よりは分隊毎に行動して、各個に行軍の準備をなす。

九月二十六日。昨日は此所労山灣頭に露營す。大仕掛にて甘藷を煮て食ふ。美味云ふべからず。飽くまで食ふ。四日分の食糧馬糧を受領して車輻に積む。余は小隊の日直下士なり。分配を受くべき燕麦は未だ来らず。更に後刻を期して返りてテントに入り眠る。午前二時頃と覚ぼしく当番に起されて、その受領に行く。各分隊共兵已に眠る。如何に起こせども受領に来らず閉口せり。夜、芋を食っている中に米の受領あり。飯盒を以て夕食を炊事し、終つて明二十六日の朝食中食の分を炊くことになる。多忙甚だし。其中に余は分隊長集れ命令により本部のテント前に集まれば、時已に十二時半なり。命令に曰く、明日

の起床は四時なりと云ふ。然らば今夜眠るは殆ど無い。其上に余は燕麦受領の為に時に起されたれば、休む時間は極小なり。此夜湾頭の連山は霞を帯び、月は朧ろに懸れり。露宮の火は芋を焼きつゝあり。日中居眠りせざる兵は無し。可愛そうなり。余は芋のたゝりにて少しく胃を害せり。家に居たなら早速消化の薬を一包飲む所なり。さすがに故郷の空、古き長火鉢を思ふ。今日は出発する予定なりしが、徴兵馬のみなる吾等の隊は、動作意に任かせず露宮の止むなきに至れり。テントは昨夜のその近傍に張りたり。

九月二十七日。晴。月は忘れないが日は忘れて終ふ様だ。朝六時半、昨夜の芋の露宮地を離れて労山湾頭を出発す。今夜は王哥庄に露宮の予定なり。順れざる馬のみなれば大い当惑す。晴天申し分なし。途上、馬上の風静かにして冷氣あり。突兀たる山、茫洋たる平野を見ながら進む。偶々路傍に家屋塔あり。皆、東洋史の挿絵を忍ばしむ。風光何となく大陸的なるは余が平素の趣味に会ひてうれし。午后一時十分なり。盛なる砲声を聞く。病兵また苦力に担はれて来るあり、凄惨の感なしとせず。然かも余が分隊の車輛は出ない。

九月二十八日。晴天。今日は不動様の御祭りだ。昨夜は第六分隊のみ独立して王哥庄の北一里の地に到り、堀内第一小隊長「敏曉、少尉、連隊段列第一小隊長」の揮下に入りて露宮せり。テントは張らず野宿す。煮て置いた食いたい芋も食はずに眠りに入つて終つた。蓋し出る車輛は出せとの命令ありし為、正直に出したる所、少しく進みすぎて終ひ、大苦心して思ふ様ならざる車輛をも前馬を代へては迎へに来させて、漸く一ヶ所に集合せしめたのが十一時過ぎであつた。今日は大橋を指して行軍す。何れを見ても山に木はなく、大石塊は流された様に又雨に洗ひ出された様に現はれて居る。第二小隊の残余と第三小隊は、昨夜王哥庄に露宮す。聞く、昨夜歩兵一個中隊全滅せりと。砲兵

の方も弾薬を急ぐ。田子軍曹は已に二里も前方にあり。后前九時半、先頭より五車輛を以て余の指揮に入れ、混成の一個分隊を作り、斎藤分隊と称せらる。早足にて心地よく進む。午后六時四十分、潭苗「廟」庄より盛岡特務曹長「保治郎、連隊段列第二小隊長」の命令により、余は中村に向て進行せる中野大尉の下に伝令に行く。其要旨に曰く、

一、吾が盛岡小隊は今北郊「郭」村に向て行軍中なり。

一、今夜北郊「郭」村に露宮の予定なり。

一、昨日に於ける本隊の取る可き行動を問ふ。

月を踏んで北郊「郭」村に着して露宮せる小隊に返る。時二十一時二十五分なり。今日伝令にて歩むこと十五里なり。乗馬小平号大いに疲る。余又歩行困難なり。特務曹長大に喜び、梨一個を呉れたり。道中己れの姿が地に影を写す心地よし。今夜は故郷の祭礼の日なり。今夜は不動様のお祭りの晩也。月あり犬鳴く石の道を、秋の虫を聞きつゝ、單騎を馳す、壮なり矣。余が中野大尉の命令を齎らざりし間は段列の行動定まらず。一同待ち居たり。返りて兵員一同を集めて小隊長は明日の命令を下せり。それから食物を炊き、弁当も作つて置いて寝る。今朝の起床は三時半なりし上行軍間大に草臥れて眠むし。寝る日間はなし。

九月二十九日。晴。上のお祭りの日なり。昨夜前線にありたりと云ふ輪卒三名来れり。話を聞くに、我軍は前夜焼打をなし、二十八日の朝は煙が盛んに上り居たりと。英国軍に会う。英語にて問へば、戦争は三ヶ月中に終るべし、クリスマスは家に歸りてなすと云へり。我吾も正月は家にてしたし。午后四時、中村着。七時、流亭に着す。途中六時半、行進の先方に当り砲火あり。音は車輛の響にて聞えず。今夜は母の亡くなりし日なり。流亭の露宮地月清し。芋を飯盒にて煮て食ふ。割合によく休む。テントを張らずに寝る。(欄外に「記章」と書

き込みあり)

九月三十日。晴。朝六時半、流亭を發す。午前八時五十分、正に我等は白沙河の大河原を通過して中休をなせし所、三号飛行機が着陸した。快晴の空高く青し。十時二十分、洛園澗村に中休す。午后二時下王埠庄に着す。これより先、余は先發して段列の砲廠の位置及び中野大尉を尋ねて、後より本隊の来るべき為を報告す。此所は砲声昨日より夜を通じて止まず。梨の木多く、内地の雑木林の如く太き割に長け低くきに驚く。厭く迄食う。少しく閑あり。即墨城の風景を思ひ快哉数回叫ぶ。

十月一日。午前中は被服の手入なり。久しぶりにて休む。然れども余は日直にして閑ならず。午后は車輛の手入れなり。余の分隊は後二個車輛来らず。今日は着するならん。午前中は忙殺された。午後兵隊が十四羽の鶏を徵發し来れり。天氣大に好し。

十月二日。晴天。命令により未着の車輛を迎へ援助すべき任務を帯びて、余は馬匹十五駢を引率して即墨の方向に北行す。出發に当り鶏を味噌で旨く煮た菜で朝食をし、弁当に入れて即墨まで行きたるに、網野伍長ありて二個車輛を引率して、完全の馬匹は夫々二駢の後馬あるのみにて動く得はず、閉口中なりき。二時半に至り、余の引率して行きし馬を付けて輓曳し、七時頃流亭に着し露營す。此地は前に吾等が通過せしときは何も無く淋しかりしが、今回来て見れば酒保あり。網野と共に行き、ゼンザイ一杯五錢と氷砂糖十錢を食ふ。甘し。

十月三日。朝六時起く。將校居らず呑氣なり。出發前支那人来り煙草を売らんとせしに、網野及び其部下に取られて泣面にて帰れり。昨日即墨にて網野に会ひたる時、其車輛に上等兵山室退輔あり。神中(註：神奈川中学)一年だけやりたる者。余は一所なりき。彼は六角橋の者にて神奈川新井氏の妹の嫁せし家の婿なり。余を搜がし居たりと

云う。然らば親戚続きなり。即墨城外氣清き所旧友に会つて故山の縁を語る。何となく心地よし。柿一個をもらひて食ふ。今日は雨模様あり。分隊全員の揃ひたるテントに返るのはさながらに家に帰る如き感あり。余の不在中兵等鶏四十羽を掠奪し置きたり。精勤な連中なり。テントは二日前の所から移転して山室の十二分隊と隣り合つて位置して居つた。砲声は尚ほも盛なり。

十月四日、曇りたれば降らず。鶏の料理のみ食ふ。午前午后共駢馬教練をなす。午后一時、独立下士哨の司令として、上等兵一名、卒五名を引率して独立下士哨を編成して下王埠庄東方高地に至り、前夜の石破軍曹と交代す。敵弾眼下に破裂するが能く見ゆ。我砲兵が敵の砲艦を射撃するが遺憾なく見ゆ。実に実に快なり。夜十二時まで余が起き、それより上等兵を起して交代す。砲声比較的減ぜり。

十月五日。快晴、静穏なり。小春日和の今日此頃、故山を耕す近隣の者はさぞ快いであろう。午前七時四十分、飛行機頭上を東航する間もなく、敵の一機も現はれ同方向に進めり。又我一機下士哨の上を過るあり、心地よし。昨日は十五夜なりと云ふ兵あり。果して然るや否や。十二時頃、堀内少尉と平野少尉「伝治、連隊段列第三小隊長」来り。此下士哨より見ゆる彼の山々より敵の本防禦線なり。我には砲数極めて小なり。只歩兵の肉薄戦あるのみと余に語れり(日記を清書するに当りて一曰く―此見、當時は趣味を以て聞きたれば、我日記にまで記入せり。然れども実在とは相反せしこと勿論なり)。二時頃佐賀連隊の歩兵伍長来り語る所を聞くに、来る十五日頃に我攻城二十八里砲の来るを待つて総攻撃あるべしと。今日は天氣良好なり。小春の事とて故山には学生等の旅行など盛なるべし。川和の菊亦近く聞くべし。四時五十分、木村軍曹に申し送りに返る。

十月六日。晴天。六時半頃、飛行機頭上に来る。下にて吾等は毎日

繋駕演習なり。他の練兵とはなし。

十月七日。快晴。独立下士哨を編成して司令となり、例の下王埠庄東方の高地に到り、橋本伍長と交代す。将校兵卒共に戦争にあきて来た様に見える。今日、砲声静かなり。

十月八日。晴天。風出ず、天候の変化なきを祈るなり。此頃草臥れて堪らない。早く本防禦線が落ちればよい。昨日に至り川島の者現役蹄鉄工島崎申造と云ふがありしを始めて知り。九分隊には程ヶ谷会社付近の海老塚某ありと小林より聞く。午后四時半、異常なく外衛兵を太田軍曹に申し送る。

十月九日。晴天。昨日家へと神奈川へ手紙を出す。午前は弾丸の手入なれば、早く終つて返り休む。午后は○時半より繋駕演習なり。昨日、神中村長及神奈川より手紙来る。午后の演習の際、終りに近く、小隊長先頭、六、五、七、八分隊の順にて野外に曳輓せり。余の分隊は好成績なり。嬉れし。七、八分隊は不良なり。

十月十日。晴天。午前三時半起床。直ちに食事して連隊観測所構築の為、使役兵を引率して行く。菜なければ塩を付けて飯を食ひ、甘藷をも煮て喰ひて出発す。午前九時三十分、歩兵の第一線より千米の後方口子に到る。敵弾絶えず頭上を過り、空氣を切つて飛ぶ音、物慘し。途中李村河の辺りにて吾等の行進路を越えて路の左方二百米程と覺ぼしき地に敵の着発弾来ること猛烈なり。破裂する様絵の如し。其恐ろしき音、其地響きは筆紙に写し難きは残念なり。道路を駆足にて通過せしに、路上及び左右に落着の趾点々たり。敵弾のトンネルの下を行くなり。草臥れたる足もかくては重しと感ぜず。連隊観測所より青島迄は約一里半ありと聞けり。午后は英蓮「夾嶺」溝の観測所に至る。交通壕を構成する為、余と田子軍曹とは各々工事の班長となる。弾丸盛に來りては観測所の辺りに落つ。遠く李村の方に通過するのもあり。

頭上に弾丸絶えず。順れては平然。

十月十一日。晴天。兵員皆快晴を天佑なりと称す。昨夜は実に有効なる榴散弾を注がれた。頭上で曳火して彈子破片の落ちて草木に当てる音のすさまじさは云ふべくもない。三米も破裂点が近ければやられてしまったらう。それも二、三十回も来たのだった。皆、掩体の影にかくれて居た。中には穴を掘つて中に頭を入れてるのもあった。其他は常に頭上をヒュー／＼音を立て、飛んだが平氣なものだった。午后十一時半、夜間作業終り。少しく山を登つて天然の良き地隙の所に返り、転寢を為す。朝迄夜を徹して榴彈及榴散弾を浴びせられる事、実に猛烈であつたが、能く眠る。昨夜將校の乗馬一頭は敵彈の為に倒されて終つた。朝起床七時。九時作業始なり。実は今日、幕舎に返れる予定なるに、明後日迄滞在、連続して作業をなすべき由なり。杜に角戦争に來てる様な氣がして來た。彈が來ないと演習に來てる様な氣がする。今日、盛岡特務曹長の語る所の予定は、十一月中に落せばよい予定なりと。又曰く、砲台占領の方法は、正攻法によらず強襲法によるべしと。

十月十二日。昨夜は小便に起きたるに空は雨雲を宿し居たりしが、明けて見れば晴天なり。天佑なりき。起床は五時半なり。此山中の生活状態は、地隙の中に露を防ぐテントも無く、青天井の下にゴロ寝ゴロ起。朝、円匙を担いで山を下り、夜になりて壕抵に影を写しつゝ、山に上りて休む様、山族に似て居る。山上なれば静かなる目でも木の葉は戦ぐ。其上砲彈が山に着発する毎に寝てる枕下の壕壁よりは土砂がハラ／＼と落ちて来る。昨日は府下境村出の内田と云ふ分隊の兵と并んで寝た。一つの梨があつたから二人で分けて食つた。絶えず彈子は雨の様に降つて居た。朝寝て夕下を見たら小便の跡がアリ／＼していた。此所地隙の深さは約三間なり。巾は一間弱。敵彈は昨夜前夜より

少なかりき。今夜余の班は夜間作業あれば、午后一時半より寝る事を許されて、例の位置で砂利の上に寝る。然し目の前で工兵が作業をするし、寝てる地隙が通路なのだから人が通つて寝るも何も出来やしない。今日、少し腹痛む。

十月十三日、晴天。昨日風強かりし為、雨にでもならざるかと心配せしが、天佑にして快晴となる。昨日は夜の七時までに莢蓮「夾嶺」溝の山上まで上下を命ぜらるゝこと三回に及び、大に閉口する。山上には天然の大石あり。其北側に観測所は構築された。青島は眼下にあり。首を廻せば逸独の租借地は全面を眺むべし。此日午后二時より四時まで休戦なりと云ふ歩兵の将校ありしと云ふ兵あり。其故か七時頃まで砲声なし。かくては或は勸降使の為に降参にても決せしにはあらざるかと思はれ、嬉しく結びし故山の夢と思ひきや、夜半に覺めてせめてテントに返りたきこと甚だしかり。朝七時に近く飛行機が偵察に來れり。焼芋を食ひながら壕の中より見る。單葉機なり。白雲の上に陰見する様、さも心地よげなり。七時三十五分より一時間を与えられ、山上に達する通路を修繕し、小隊長の検査も無事に済みて帰營の途に付く。只余のみは工具を第二次に來れる作業手に申送る可く各小隊より兵一名を残留せしめて午后まで残留す。小隊長曰く、今日は敵より軍使來り、昨日我より送りたる軍使に對ふべきなりと。見れば土地は變つても野菊が咲いて居る。直径一冊米位で黄色なり。なつかし、可愛らし。此使役に來て本田仲三氏に會ふこと前後三回なり。午后一時半頃であつた。実に実に烈しき砲声と、猛烈なる破裂の音が間断なく頭上を驚ろかす。其下で夢を見る様に寝ること二時間余なり。仰いで見ると、上には古い太いけんぼなしの木がある。えんじゅの木もある。今し午后の日を受けて居る。秋の半の事とて足長蜂が急に思い付く事あつた様に上り下りして居る。砲声なくとも時に驚ろき

ては飛び、又来るなり。空は青く木は古く黒い。僕は思ひ付き次第歌を歌つた。兵卒の話を聞くと

「甲」 向の軍使は何てつて來たろ。

「乙」 これで降参はしやしまいや。

こんな日間あるときは故郷を思ふものだ。彼等の心を汲むや切なり。午后二時半、皆は芋を煮て來ると云つて飯盒を提げて出て行つた。一人飯盒一杯の芋を平げた。間もなく堀内少尉來る。土工具の申送を終へて、三時五十五分、此地を出発す。砲声を後に後にと一同四人は三里許りの道を返る。午后四時四十分、幕舎に返る。腹を減らして歸つて見れば、飯も炊いてある、菜もある、味噌もある。早速芋も出來る、梨も呉れる、昨夜渡されたと云ふパンも一枚ある。直ちに食つて寝る。温かい家庭の味を知らない余は、之れにて十分なり。返路酒保で十錢でゼンザイ二杯飲む。甘し甘し。

十月十四日。快晴。午前中二時間繋駕演習あり。午後余は乗馬演習の指揮官を命ぜられた。一時間半演習せしめたり。夜、酒が渡りたれば僕はチャンチュウ一升を買わせて飲ませてやつた。僕の分隊の平伝八と七分隊の岡田喜四郎とがカッポレを踊り出した。僕の分隊が一番景氣が良いものだから、元氣な連中が集まつて來て、義太夫もやる浪花節もある。盛なものだ。

十月十五日。雨天。午前中繋駕演習をなす。終り頃より瀟々として降り始めた。テントの中には雨漏りがする。飯を炊いて干物で中食をした。ジミ／＼して気持ちが悪いこと甚だしい。馬にはまし位の生活状態である。今夜、とても横になつて寝る事は出来まい。然し閑をぬすんで家兄二名に手紙を送つた。

十月十六日。昨日來の降雨止む景色なし。敷物は栗柄を散らした上に坎を破つて作つたむしろ一枚を撃いたのみだから下からは水が湿み

て来る。テントからは漏る。とても困つて終う。それで午前中、今日は乗馬演習なりと云ふ有りし。たがひの身代をグシヨにして終つたら何時乾はくだろう。川の水は濁つて、飯を炊く水は五町もある遠方から、広い李村河の支流を涉つて汲んで来るのだ。大切だ。兵員皆靴の中は水がグシャ／＼してる。朝八時、昨夜来攻城砲兵の使役に行きたる兵隊返る。夜を徹して寝ずにトロッコを押したりと云ふ。兵隊程気の毒なものはない。僕は一日も早く皇軍が青島を落さん事を欲し、奮励せずには居れない。同時に彼等を最愛の父兄妻子の下に返してやり度い。馬屋当番は居る所も無い。そして馬は振へて居る。

十月十七日。曇天。空や、明るければ晴れそう。昨日の大雨には閉口した。寝て居れば頭の所にポツリ／＼と雨が漏つて来る。寒くて寒くて六に寝られなかった。苦るし紛れに小声にて軍歌を歌ふ。其中に十一時半に至り不次呼集あり。食料、馬糧、将校行李、其他酒保の物品、悉く流失す。助かるものを助けろと云ふことであれば大いに働く。余は日直なり。一時半頃余は再び起されて、各分隊より一名宛使役を本部に差し出せり。今夜、余は水が膝以上に及んだが、干しもせず眠りに就く。兵隊は骨が折れる。精神修養には只一の学校だ。幸にも若干の雲はあれど暖かき好天気となつた。河の水は現金にもすっかり引いて終い、昨夜の景色はない。午前、幕舎の手入、午後一寸馬の運動あり。テントにては、余は善い落ち付いた所に居を占めた。連段は永久に王埠庄に居るとの事故、幕舎は丁寧に作りたり。此頃は汁粉屋二、三軒はあるし、方々勝手がよくなつた。

十月十八日。晴。雲あれど太陽あり。昨夜は静かに寝た。今日、余は部隊日直なれど、午後二時より市川二等計手を尋ねて語る。返りに及び菓子四個を占領せり。

十月十九日。雨天。テントは大改繕を加へたので雨漏りがしなく

なつた。今日は部隊日直なり。朝五十人許りの使役兵を出すのに一方ならず多忙を極めた。診断には岡田上等兵を代理に出して、僕はテントの中で阿弥陀を引いてやつた。正午過ぎる頃より猛烈なる強風起り、細雨を交ゆ。将校は無暗に日直下士、日直下士と云ふて当番を呼びに寄す。実に忙はしく、厭や気も出る。未だ修養が足りない。風にテントが飛ばなければよいと心配す。昨夜十二時近く、呼び起こされて事務室に行くと、父からの手紙も来て居るのを見た。寝むいが直ちに読んで、千金に抵ると思つた。今朝又弟兄よりの手紙を見た。丁寧な故山の様子が書いてあつた。嬉しかった。一先ず安心した。

十月二十日。快晴。朝極めて寒し。靴下を洗濯した。昨日は日直なりし為、朝より走り廻り外套がすっかり濡れて終つたので、夜掛けて寝るものが無い次第で、夜中寒くて眠れなかった。朝、馬の手入から帰つて見ると、乱雑なテントの中に故郷をも照らす太陽が差し込んでゐた。風寒けれども心地よし。日光浴をしながら兵隊が故郷に送る書信を一通許り書いてやつた。今日は一日呑気なりき。ミエ、マリに支那少女の絵葉書を送る。

十月二十一日。晴。昨夜の寒かつたこと。実に寝られなかった。今日は又、新観測所構築の使役として兵卒二十名を引率して大山なる中野大尉の下に到る。余は中精兵十名を指揮下に入れられ、大山頭の旧観測所を破壊して、材料一切を新観測所に運搬すべく命ぜられた。命を受けて直ちに大山の麓に到り、月の入るを待ちて山に登り、目的を遂行すべしとなり、此観測所は余を敵に暴露して最も危険の地点なり。作美大尉「法輪、連隊本部観測長」及堀内少尉の負傷せしは、実に此観測所なり。月の入るまで山麓にて真の露宮をなす。テント無し。眠ることを許されたるなり。兵は飯盒にて芋を焼いて呉れた。火を炊いて大に煮た。斯くて愈々夜間作業を為さんとして山に登れば、

探照灯極めて頻繁にして作業極めて困難なり。のみならず工事は全部敵に暴露せるなり。加之敵弾は或は頭上を過ぎ、或は山下に着発曳火せり。大いに閉口す。余は腰をかゝめて工事の陰に立ち西南方を見れば、膠州湾口の西岸に突兀せる鋸歯の如き連山の直上に、赤く黄色を呈せる利鎌の様な新月が、全く直角に突き立つて居た物慘ごき、忘れられず。やがて作業を始めて、僕はサーチライトを向けられる、毎に「来たぞ、来たぞ」と叫んで、彼等を其儘静止せしめたり。かゝる中に月は山の向に没した。人員の少なきと、グズ／＼すると我身が危険なるとの為、兵能く働く。夜の中に山影の中段まで角材を下し置き、翌朝山下なる所定の位置に運搬せしむ。どーだい、すごい月だな、と云へば、兵は今日は雨が無いだろうと答ふ。作業終りてテント無しのごろ寝なれど、比較的暖かにより寝る。

十月二十二日。快晴。朝六時半頃、起きて昨夜の芋の残りを食ひ、昨夜途中迄却し置きたる材木を運搬せしむ。角材四本と土工具を持たせて、一名を監視に留めて、中野大尉の下に返り報告す。午前中は休養すべく、暇をもらつた。好い天気。寝転ろんだ。附近、木の葉が紅葉し始めた。昨日来の余の受負ひたる工事は、余が指揮官にして独立せしめられしを以て割合に呑気なりき。平野少尉曰く、総攻撃は今日の末なるべしと。

十月二十三日。快々晴。昨夜は中野大尉の新観測所の掩壕の穴の中に大根漬かに寝る。起床五時、今朝は猛烈に曳火弾を打ちやがる。山を下りて朝食し、七時作業始めなれば、山に登りしに敵の単葉飛行機は偵察に來り。吾等が上を去らず、僕等は壕の中に入り陰れて雑談し居たり。時々頭を出して空を見る。今日の作業は壕を掘り下げるのだが、大きな丸石が出て来て何程兵隊が努力しても可効なし。夕方に至り、杜に角大部分出来たり。今夜は夜間作業あり。

十月二十四日 早朝雨。後、晴れたり曇ったり。昨夜の中に観測所丈けは出来上りたり。工事は敵の探照灯と光弾の為に大に妨害さる。

昨夜敵は我を発見せしもの見え、大分に榴散弾が来る。三小隊には山室が来て居る。此新観測所から青島を見るに高島山より港外を見る位なり。砲戦は猪子山と西ヶ谷蓄水池との距離位なり。一昨夜腹を冷やしたので下痢腹痛大に困る。今日は露宮地に帰れるらし。山室から阿伽陀葉をもらひて飲む。山東省の山野は漸く紅葉して来た。砲声の絶え間には夜来の強風が山上の短小なる松に吹きて異様な音を出すなり。今日は作業者の為、酒保より売品を送り来る。特務総長は其各品を三等分して各小隊の古参下士に命じて売らしむ。僕は第二小隊の酒保の親方となる。品目に曰く、そらまめの缶詰、奈良漬、朝日、赤貝缶詰、源氏豆、マッチ、なり。朝日が六個余て売れず。二十三日の夜は攻城独立中隊の作りしと云ふ絶壁に栗柄にて差し掛けをなし、其上に土を置きたる横穴如き中に入りて寝る。暁に近くなり恐るべき雨が降り始めたり。そこそこ、にも雨が漏り始めたり。余の外套の上にもポツリ／＼始まる。出るも入るも出来ざれば、起き上りて話をして居た。今日、王埠庄に帰る時に八時なり。家に帰らる心地す。腹具合は不良なり。

十月二十五日 曇天不降。病気なれば要領よく休む。夜、分隊長全部本部に集合。隊長より総攻撃に関する秘密の話あり。

十月二十六日、晴。第一回弾薬補充をなす。午前十一時出発、夜二時になりて帰舎す。冷えた腹がとてまたまらない。殊に外套を持つて行かなかつたので、体は氷の様になつて終つた。飯が食へない。加之部隊日直とぶち当つて食料分配等、大に忙殺さる。

十月二十七日 寒天は曇る。断診を受けたら練休なり。閑を得たり。山東の秋や夕日の軍馬哉

昨夜、白根学校生徒代表者よりの手紙を読む。校長の手紙もあり。故山を思う。

十月二十八日 雨。昨夜は又してもテントが漏り始めた。幸にして余が病床は助かった。夜の中、三回下る。大に閉口せり。昨日の第二回弾薬補充は各分隊より二車輜を編成せり。皆、夜遅く帰れり。余は休む。

十月二十九日 晴。練休。病名急性腸炎なり。痛みこと甚だし。

十月三十日 晴。練休。下痢甚だし。

十月三十一日 晴天。朝より我砲兵盛に猛撃を開始す。大火二ヶ所に起り、二本の煙柱をなす。巻き上る様凄惨を極めたり。タンクの破裂なりと云ふ。練休。

十一月一日 晴天。練休。昨日来の砲声、夜を通じて分時も休みなし。長石「砲」に総攻撃なり。砲声多大なること祭礼の太鼓を聞く如くなり。兵卒亦今日は一日中休養す。修一氏よりの手紙を読む。夜急に補充あり。病氣も今夜はよし。野糞をやりながら青島の空を見ると、大地を打つこと打つこと名状する能はず。砲火天に映ずるかと見れば、探照灯及光弾照明弾等又頻繁なり。盛、盛、惨、惨。

十一月二日 晴。練休。大分腹よし。

十一月三日 雨、午后止む。病氣快復。現在の幕舎は低地なれば稍々東方の高地に移転す。

十一月四日 曇。寒し。風強し。弾薬補充に行く。小隊にて五車輜を編成す。出発八時。余は第二小隊を引率す。午后四時帰舎。寒氣堪へ難し。部隊日直なり。テントは第三回目なれば善く出来たり。

十一月五日 快々晴。朝、飛行機飛ぶ。今日は命により残留す。昨夜は烈寒、今朝大霜。氷も張りたり。

十一月六日 曇。弾薬補充あり。余は河南の中間廠まで先発して弾

薬を受領すべく午后七時に出発す。帰舎せしは翌日の午前四時なり。

十一月七日 曇。朝、正に五車輜の編成にて弾薬補充に出発せんとし、駁者二名は馬の件に付き口論し、余は傍の火にてあたりつゝありしとき報来れり。青島陥落!!!「馬装を解け!!別命を待て!!」本部の前にて曹長助手の上等兵が叫びたり。之れを聞きたるときの嬉しさ。早速手紙が出ると云ふから暗い幕舎の中に入って立ち膝で家へ通知を書く。まあ命だけは助かったぞ。今年中に国へ帰れるか?夜八時、隊長の訓話あり。一同陛下の万才と、段列の万歳を唱へて、雑沓して夫々分隊に帰る。心地よし。強風、砂は飛ぶ。其中を弾丸補充をしたのであった。中々榮では無かったが、今日を見よ、静かな日本晴。飛行機の偵察も来なければ、青島も落ちて居る。

十一月八日 曇。氣抜けして、平凡。

十一月九日 晴。車輜を出して大山の集積所に到り、弾薬を東李村之攻城廠まで返納す。行軍中今迄の如く敵弾を慮顧して各分隊の間隔三百米を取る必要もなし。馬上自ら心地よし。

十一月十日 晴。大山集積所より薬莢を東李村に運搬す。

十一月十一日 曇。命令により余は輓重車十車両、輪卒十名を指揮して薬莢を満載して下王埠庄より東李村の攻城廠に返納す。十時半出発。途中汁粉など食ひて午后二時頃帰舎す。

十一月十二日 曇。幕舎は韓家庄に移転すべしとの由にて、余の分隊よりも準備の為、兵二名を島村伍長の指揮下に入れて送る。

十一月十三日 降雨。移転は取り止めとなる。

十一月十四日 曇。寒風強し。午前馬術。

十一月十五日 晴天。午前駢馬演習。

十一月十六日 晴天。入城式の日。段列よりは隊長、特務曹長、河井軍曹、及び卒二十名を出す。六分隊よりは小林作次郎及内田秀吉を

出す。馬の運動一時間後は馬の手入なり。

十一月十七日 晴天。午前三時起床。朝食を炊いて五時整列。青島見学に出発す。分隊長以上は乗馬なり。余は高荷に乗る。午前十時四十分、青島練兵場にて戦死者の墓を吊ふ。附近は外国の景の如し。

十一月十八日 曇。明日は韓家庄に移転すべき旨命ぜらる。今日は先ず各分隊にて車輛二個を運ぶ。

十一月十九日 雨。先ず後の二個車輛を運ぶと共にテントの材料、基他全部韓家庄に移る。余は特に乞ふて徒歩にて移る。途中本田仲三氏に会ふ。今度の家は放列の位置にして、砲手掩壕の中に住み込む。少しく穴を掘りて、四囲は木材で囲み、其外側を土囊にて囲み、上面には二層の土囊を列べ、其上を土にて塗り上げたり。一見炭釜の如し。余の分隊は分配せられたる丈の砲手掩壕丈けには足りず、建て増しをせり。

十一月二十日 曇。大山集積所まで弾薬受領に行く。帰国と雖も連段の弾薬車は空にせざるなり。途中日光あれども急に雪降り始め寒さ云はん方なし。此頃は毎朝氷りて寒し。

十一月二十一日 晴。青島砲台を見学に行く。乗馬なり。兵は徒歩。十一時半、ビスマルク砲台を見学す。イルチス砲台にて中食をなす。一時半、イルチス砲台見学終り。帰路平野少尉の先導にて台東鎮東砲台及小堪山堡壘等を見学す。早足にて帰れば英蓮「夾嶺」溝にて兵一同に遂ひ付く。

十一月二十二日 晴。小隊長は他の分隊長若干及砲手を連れて今日一日留守す。余は残留して、小隊を指揮して馬の運動の為外乗す。

十一月二十三日 晴。吾等の部隊は、凱旋部隊の先発として、二十八日沙子口より上船の予定なり。二十五日には韓家庄を出発すべし。今日は午前、馬の検査あり。午後は馬の運動をなす。

十一月二十四日 晴天。余は命令により小隊の兵卒十六名を引率して、平野少尉の指揮の下に台東鎮西砲台に至り、捕獲兵器を受領して青島ビスマーク兵舎まで運搬す。主として小銃、剣、機関銃及砲、其彈丸等なり。紀念に敵兵の水飲器及び機関砲の葉莢二を占領して帰る。午前午後二回運ぶ。

十一月二十五日 晴。昨日の如く出張を命ぜらる。今日は台東鎮の東砲台及び附近の一野堡に行く。特務曹長揮指なり。倉庫に返納等総て僕がやる。

十一月二十六日 晴。平凡。

十一月二十七日 晴。愈々我等の隊は無期延期となつて終つた。遠分当地に滞在だ。既の準備や何かで多忙になる。今日は既の風除けを作る。余は衛兵司令なれば四時半より服す。衛兵所極めて不完全なれば、夜は寒くて眠れず。

十一月二十八日 晴。午后四時半、異常なく交代す。

十一月二十九日 晴。午前、乗馬演習、午后既の手入。

十一月三十日 晴。午前中、野外乗馬をなす。

十二月一日 晴。午前中、乗馬練習。

十二月二日 曇。午前、乗馬演習。

十二月三日 曇。寒風。午前、乗馬演習なす。

十二月四日 曇。寒風堪え難し。午前の乗馬演習は中々につらし。

十二月五日 曇天、寒し。午前乗馬演習、午後衛兵司令に服す。歩哨に川島の島崎由造氏あり。時に故山の事を語る。

十二月六日 晴。昨夜幸に降らざりき。寒き為眠る得はず。加ふるに風を引きたり。午后、衛兵所の東北方に不発弾の破裂の音あり。行きて見れば支那人が信管を取らんとしてやられたるなり。見る影もなし。両手両足の肉は飛び散りて、被服火に燃え、顔面は火薬に焦げた

り。未だ死に切らず。

十二月七日 晴。午前、乗馬演習。

十二月八日 晴。同前日。

十二月九日 晴。同前日。

十二月十日 晴。午前、青島東部なる山嶺山砲台の方向に外乗す。

午後は四房山頂にて下士以上の宴会あり。余は途中にて逃げたり。網野伍長は石毛伍長になぐられたりと。愚也。

十二月十一日 晴。午前、馬術。

十二月十二日 晴。終日、勲功記入の為事務室にて暮す。

十二月十三日 晴。朝七時半整列。材料運搬の為、李村に行く。余の分隊は最新式なる二十珊米榴弾砲の車輛を繋駕して、モルトケ兵營の青島守備軍兵器廠に運搬す。歸舎に当り同廠より小隊の輓馬全部を引率して歸る可き旨を命ぜられ、元氣よく歸る。

十二月十四日 晴。午前、三個小隊合併して、段列長の指揮にて青島の広場に至り馬術を行ふ。

十二月十五日 晴。分隊を一切岡田上等兵に一任して、事ム室に行き功績を記入す。

十二月十六日 晴。同前日。

十二月十七日 晴。同前日。

十二月十八日 晴。各小隊既当番の外は全部青島に行きて連隊長の告別式に臨む。僕は日直にして残留す。午前中に歸り来れり。午後は各分隊毎に写真を取る。其後は事ム室にて功績記入をなす。夜も使役せしが女の筑前琵琶師来りたれば中止して、經理室にて琵琶を聞く。僕は浪華節は大キライなれば琵琶がよい。常陸丸に日本海が時節柄身に沁みたり。大担なる女よ。年の程二十二、三なり。

十二月十九日 晴。午后衛兵司令として山東夜に於ける最後の衛兵

をなす。

十二月二十日 晴。愈々二十三日は上船すべき命令なれば、今日各小隊共十五車輛を長〔張〕村まで運ぶ。余の分隊にても太田上等兵に命じて第二、第四彈藥車を運搬せしむ。明二十一日を以て全部引き継ぎの予定なり。

十二月二十一日 晴。午前九時、韓家庄出發。酒保が別れにやつて来る。一先ず長〔張〕村を過ぎて戚家庄の畑の中に車輛を運ぶ。我分隊は二車輛を置いて馬隊にて長〔張〕村に歸り露營す。僕の分隊は憲兵分隊の厩を借りたり。途中実に妙石奇山の異景絶色を眺めて心地よし。

十二月二十二日 晴。午前五時半、火を炊いて、光を借りて馬装す。二十日に此長〔張〕村まで運び置きたりし車輛を繋駕して、直ちに沙子口の棧橋の所まで運ぶ。余、更に命により二十一日戚家庄まで運び置きたりし車輛を運搬して、棧橋の所まで引率すべく、馬体にて戚家庄まで戻りたり。午后、馬の檢疫を受けて後、兼ねて作り置かれたる宿舎に入りて露營す。設備せしものとしては不完全にて実に寒し。夜眠れず。小便をすれば砂か雪の如く見ゆ。氷れるなり。食事当番は大に困り居たり。

十二月二十三日 晴天。整列午前五時三十分。まだ暗し。下士官は各々手分けをなして積載をなす。余は材料を（主として車輛を）棧橋まで肩力にて運ぶ。外の連隊の砲兵輪卒を用ひてなす。製転機に不順なれば余は大に困る。然し予定より早く終る。午後三時乗船終り、直ちに出發す。寒氣甚だしく、甲板上の水は氷りて靴にて歩行極めて危険也。藥取丸と云ふ。三小隊は神王丸に乗る。

十二月二十四日 曇天。平々凡々。

十二月二十五日 曇り。夜は玄海に入る。夕食後、遠山某の浪華節

を聞く。川和「の」市の日なり。

十二月二十六日 晴。午前十時、無事似島着。中食前に消毒完了。少しく航海して宇品の沖に碇泊す。一夜を茲にて明かすとなり。

十二月二十七日 晴。夜十時、宇品出帆。船中に副島大将の三男なりと云ふ人居たりしが、宇品に上陸せり。特務曹長と二名の下士、一名の士卒も又宇品上陸、先発せり。

十二月二十八日 晴。神戸「の」市の日也。瀬戸内海を航進す。極めて平凡なり。四国の高山雪白し。

十二月二十九日 快晴。出征の時とは異なり敵艦に対する顧慮が無いので、船は陸地の見えない位沖を航進す。今朝より夢の如く富士山が独り雲の間に巍峨として聳ゆるのを見る。はつきりとしては居るが、夢の様な気がしてならない。軍歌に、「響く砲声万電の煙の中を三百里、帰れば雲間に巍峨として、我を迎ふる芙蓉峯」思わず口吟じた。日直をば正午を以て申し送り、ゆつくりと船首に座して四方を見る。蓋し終世の快なり。

十二月三十日 晴。下士官手分けして材料を上陸せしむ。余は最下甲板に入りて車輛を起重機にかける監督なり。終りて午后三時頃、一隻のハシケにて鎌形上等兵来り、余と木村軍曹、網野伍長は之れにて上陸し馬具を整頓せしむべしと云ふ。仍ち上陸し、夜に至り帰船す。昨夜は軍港の沖に泊し居たり。蓋し軍港へは夜は入る得はざればなりと。乃ち早朝軍港に入る。其航進中、海軍のフアルマン式の複葉飛行機来りて、吾等の薬取丸上を一回す。実に心地よし。追浜に帰る際水上に落ちたる所を見たり。滑走面白かり。

十二月三十一日 曇、暴風。馬三十五頭を達磨舟に乗せて上陸す。而して軍港の庭にて馬の検査あり。之れを終りて車輛を営庭まで四駢宛を以て二回に運ぶ。第二回目に帰り来り、繋駕して第一連隊前の坂

下に到りたるとき一作に会ふ。余に髭ありし為解からざりしもの、如く、本田仲三氏居らざれば会へざりしなるべし。直ちに馬具を返納し、不入斗練兵場に行きて馬をも返納す。かくて班に返る。

大正四年一月元旦 快晴。昨夜は班長より点呼を報告せよとの事にて、余は倉繁健次郎の不在を知りしも人員異常なしと報告せり。然し之れが昨夜一時半頃、地方人と争鬭せし所を捕へられて憲兵に護送されて帰り来れり。余其かどにて責に任せよとて、罰を待つべき旨特務曹長より申付らる。定めし明日には満期できざるべしと云はる。午后隊長来り、倉繁、三日の重営倉を食ふ。余は異常なし。

一月二日 晴。早朝、倉繁は営倉より出さる。彼、安心せり。余は午后三時半頃、程ヶ谷駅着。それより本田と共に馬にて村の人々の迎へを受けて帰る。(完)

註

(1) 『秘戦史 上』付表第二三「攻城砲兵展開実施表」の九月三日欄に、「連隊段列の後尾到着」とあるから、斎藤分隊が連隊段列の最後尾を行軍していたことが分かる。

(2) 一〇月一八日に負傷したことが、『秘戦史 上』付表第二四「自九月二十九日至十月二十八日 独立第十八師団各部隊死傷表」に見て取れる。一三日にも将校が一名負傷している。なお、連隊負傷将校は作美大尉(連隊本部観測長)、下村千秋中尉(第一大隊本部観測長)、堀内少尉(連隊段列第一小隊長)の三名である。

(3) 不入斗練兵場は現在の不入斗公園。

〔附録〕

◎ 悟入録

小引。余や賦性樸訥にして、加之社会教育に浅くして、上官に阿諛するを得ざるは勿論、所謂お世辞を云ふ事にも功ならず。出戦不利なりし事一方ならず。殊に今に至り勲功の報告も凡そ知るを得たれば、回顧して自らの上官に対する遣り方の下手なりしを思うこと甚だし。余は下士に比にて決して功少なしと信ぜず。されど去る二月十一日、田子軍曹の報じ来れる所によれば、余は殊勲の乙なり。而して酒保の石野軍曹、看護長の如きは殊勲の甲なりと云ふ。お世辞をよくせざれば不利のみ多きなり。悟入を記し置く所以なり。

一、何でも本部付きになること必要なり。総ての点に益あり。

二、仕事に当りては、其日の事は其日になすべし。

三、命ぜられたる仕事を終れば、次の用事を尋ねよ。

四、総ての調査等上官の便利になる仕事は十分氣を利かして先から先まで為し置くべし。

「それはもう仕て置きました」と答える様に手を廻すべし。

五、上官は敬ふと共に親切に接せよ。尊敬は上官と間隔を遠くし、親切は之を狭くす。人を見て二者を適度に用ひよ。上官の意志を知り、独断専行宜しきを得たる行ある下士を頼甲斐ある下士と云ふ。

六、上官に頼み甲斐ある下士よと思はるゝ様に心得よ。

七、常に真面目にして命ぜられたる報告等は其日の中にせよ。

八、同じ下士官にても一階上の者ならば敬礼をせよ。彼等は嬉しがり悪くは思わす。

九、部下の勲績調査等に関する書類は非^マズ焼捨つべし。書類を見らるゝ事あらば不利多し。

十、平素より部下の勲功をば記し置くべし。之れは英文にて認むるが

よし（召集当日より調査を始むべし）。

十一、叱責は強く且つ必ず一時的なるべし。

十二、善く難事を為し遂げたときは、を^マこるべし。

十三、馬屋当番は馭者のみ。伝令、衛兵、使役は砲手より出すとし、夫々勤務に当る順番を予め彼等に知らせ置くこと。

十四、自分自身は成る可く多く使役（観測所構築の如き使役をさす）に行くべし。

十五、己の乗馬は少しくギャンギャンする位の馬の方よし。然らざれば伝令等に出でゝ困ること多し。

十六、健康には大々の注意せよ。

十七、部下に悪くまゝは我身に不利不快あり。上官に覚え善からざるは論功の際不利あり。此所手心を要す。

十八、勤ム割、人馬の編成は、速に作成せよ。知人に差し出す手紙は其都度に日を手帳に記し置き平等にせよ。

十九、日記帳は売品の当用日記の如きを二、三冊用意して、絶えず我部隊と自身の行動と全軍の行動との關係を隊長に尋ねて記入すべし。「肉弾」を著はす位の心掛が必要なり。戦地にては記念の写真位取つて置く。

二十、用事無ければ一旦凱旋したる後、外泊して我隊の残務整理を手伝ふべし。然らざれば少し位凱旋は後れても残務整理の任に就き、小隊長の助手をするべし。此れや是れ、在郷軍人出征最終の要領なり。秘伝なり。蓋し勲功の報告はよかるべければ也。

二十一、上等兵其他役に立つ奴はうんと使へ。遠慮するな。而して飲ませてやれ、食はせてやれ。又云つてやれ、「余に対する汝等の勲功は余を能く補助するものを最とす」と。

二十二、部下をして殊勲の意味を誤らしめるな。

二十三、自分の部下が決定したら、全部集合、気を付けして、毒気を抜く程の元気で自分の主義を発表すべし。

二十四、事故の起った時、所、道程等は精細に日記に誌すべし。

二十五、戦地の位置は概略売品の地図によつて頭に入れて出発せよ。然る時は方位を想像する時に便利なり。(以上は地理上の位置を知る必要)。又敵地の精図は上陸前、暇をさきて上官より仮りて写すべし。之れは直接行軍に必要なり。

二十六、軍人たるもの上官にも部下にも落ち付いたる態度あるべし。

二十七、戦地にては金は思ひ切つて使ふべし。気前を見せるは度胸を見せる所以なり。

二十八、成る可く落付きて先を考へたる上にずるく廻る可し。平素より要務令其他必要なりと思はるゝ書を求め置き、出征に当り之れを読み、部隊日直等の任務及なすべき仕事の何々なるかを知り置き、之れ以外の要務をなすものは、はね付けるべし。同僚より種々の命令を達して呉れなどと云ひて日直を利用して持込むものなり。

日独戦争に参加せる航空将校及び其使用機を左に

モーリス三号 操縦 武田中尉

同乗 眞壁中尉

モーリス八号 操縦 坂元中尉

同乗 小田曹長

ニューポール 操縦 長澤中尉

同乗 佐藤中尉

